「日本を旅し、日本を描く」

—— 日本紀行文集『我的日本』の翻訳と越境

Peichen WU (吳佩珍 : The Graduate Institute of Taiwan Literature National Chengchi University)

✉ peichen@nccu.edu.tw

(台湾) 台湾政治大学台湾文学研究所准教授兼所長。日本近代文学、日台植民地期比較文学、文化。「The Peripheral Body of Empire: Shakespearean Adaptations and Taiwan's Geopolitics」(Re-Playing Shakespeare in Asia, New York: Routledge, 2010)、『真杉静枝と殖民地台湾』(台北: 聯經出版, 2013)、「帝国残影の三部作——『あまりに野蛮な』、『葦舟、飛んだ』、そして『ヤマネコ・ドーム』」(『津島佑子の世界』、東京: 水声社, 2017)、「饒正太郎—台湾詩人と日本モダニズム詩運動」(『異郷としての日本: 東アジア留學生が見た近代』、東京: 勉誠出版, 2017)、『帝国幻想と台湾 1871-1949』(共著、東京: 花鳥社, 2021) など。

Traveling Japan, Writing Japan

: The Translation and Publishing of the Travelogue *Wareteki Nihon*

The travelogue *Wareteki Nihon* was published in December 2018 by Hakushui Sha, and included the work of eighteen Taiwanese writers from various generations. All their works in the text relate to their travels in Japan. These Taiwanese writers are Kan Yao-Ming, Ko Yu-fen, Huang Li-Chun, Wang Sheng-Hong, Jiang E, Chen Bo-Chin, Hu Mu-Ching, Sheng Hao-We, Chu He-Chih, Wu Ming-Yi, Lu Hui-Hsin, Yi Ge-Yan, Yen Shu-Hsia, and Liu Shu-Hui, whose works in this anthology depict Japanese scenery, culture and literature, and so on. This paper will focus on how this publishing project started, the process of producing this travelogue, and the evaluations and responses of Japan's literary circle and the mass media to it after its publication in Japan.

Keywords *Wareteki Nihon*(我的日本), Travelogue(紀行文), Taiwanese literature (台湾文学), Translation(翻訳), Hakusui Sha(白水社)

1 はじめに

日台の近代的関係史は、少なくとも一世紀前に遡ることが可能である。とくに、1895~1945年のあいだ、台湾は日本の植民地であったため、日本近代文学では「台湾」をめぐる主題がよく取り上げられていた。例えば、佐藤春夫「女誠扇綺譚」(1925)、田村泰次郎「日月潭工事」(1934)は、その好例である。この時期において、日本中央文壇にあこがれていた台湾人作家も日本語で創作し、中央文壇に進出しようとしていた。しかし戦後、日本の敗戦にともない、日台関係が変化し、邱永漢、陳舜臣のような在日台湾人作家を除くと、台湾人作家は殆ど創作を中断することを余儀なくされてしまった。また、日本文壇のなかでも、「台湾」はすでに置き去りにされてしまった。そのような中で、1980年に出版された丸谷才一の『裏声で歌え君が代』は1970年代に在日台湾人の政治運動を題材にした数少ない小説である。1980年代に入ってから、台湾の民主化が進むにしたがい、2000年以降、戦前台湾の歴史や記憶もじょじょに再構築される段階へと入っていく。魏徳聖監督の『海角七号』(2008)、『セディクバレイ』(2011)、『KANO』(2014)など、植民地期の日台関係を描く映画は、台湾民衆の熱狂的な支持を得た。日本人作家も、日台の歴史記憶と人々の交流を題材とした作品を創作し始めた。例えば、津島佑子『あまりに野蛮な』(2008)、吉田修一『路(ルー)』(2012)、南乃アサ『美麗島紀行』(2015)などである¹。

その後、日本文壇で活躍している台湾生まれ日本育ちの東山彰良や温又柔、そして台湾生まれで成長後、日本語を習得し、2021年8月に芥川賞を受賞した李琴峰は、日本人の読者を想定し、日本と台湾との間を往復しながら、自らの立場と観点から自らの世代の日台関係の物語を築き上げてゆく。これらの作家の日本語の作品は、中国語への翻訳を通して、台湾の読者に届けられることとなった²。

それに対して、台湾現代文学において「日本」は長い間、重要な創作上の題材であり続けてきた。日本は、台湾作家が好んで訪ねる場所だけでなく、創作のインスピレーションや描く対象でもある。とはいえ、2018年12月まで台湾作家の日本紀行文文集は、一度も出版されたことがなく、翻訳を通して日本の読者に届けられることも無論なかった。

筆者の勤め先である政治大学台湾文学研究所では、二年か三年に一度日本、韓国と台湾の作家を招き、東アジア作家会議を開催しているが、2017年の会議の後、参加者の一人である作家多和田葉子は後に、『日本経済新聞』におけるコラム「プロムナード」に寄せた随筆「台湾の月台(プラットフォーム)」³を送ってくれた。これは台湾の旅情にあふれる珠玉の紀行文である。この散文に出会ったことがきっかけとなり、台湾人作家がどの

¹ 津島佑子『あまりに野蛮な』(2008)、吉田修一『路(ルー)』(2012)、南乃アサ『美麗島紀行』(2015)は、それぞれ台湾を舞台とした小説、随筆で、台湾でも中国語訳(『太過野蛮的』(呉佩珍訳、印刻出版、2012)、『路』(劉姿君訳、聯経出版、2013)、『美麗島紀行』(劉姿君訳、聯経出版、2016)が出版された。

² 呉佩珍「當代台灣的日本文學譯介二三事」(『文訊』2019年3月)。

³ 多和田葉子「プロムナード 台湾の月台」(『日本経済新聞』2017年5月1日)。

ように日本の紀行文を書いてきたか、筆者は考え始めた。

台湾と台湾人にとって、「日本」とは何か。そして台湾人作家は、「日本」をどのように観察し、「日本」をどのように描くのか。この問題意識から出発し、台湾人作家の日本紀行文を収録、翻訳し、最後、日本で出版された『我的日本』が生成されたプロセス、反響ないし日台文壇にとっての意味を紹介することが、本論文の目的である。

2 日本紀行散文集『我的日本』(2018)の生成プロセス

上記の問題意識を踏まえて、その後、調査に着手し始めた。それで1950年代生まれから1980年代生まれまでの台湾作家が、「日本」をテーマとして創作することは、継続的な現象であり、そのなかには、散文も小説も含まれている。しかしながら、いままで「日本」をテーマとする散文集が出版されたことはなかった。日本人の読者を想定しながら、日本紀行文集、『我的日本』の構想がここから始まったが、日本への旅を通して、独特な観点で日本文化を考察し、現代日本の姿を浮かび上がらせるためにはどうしたらいいかと考えた。多様性を提示するため、作家のジェンダー、描かれる日本の地理的バランス、テーマ、翻訳者に配慮した上で、最終的に以下の十八人の作家たちの作品を選んだ。

孫梓評(1972年生まれ)

「思い出のかげら」(2015)

柯裕棻(1968年生まれ)

「寺院の日常」(2015)

黃麗群(1979年生まれ)

「いつかあなたが金沢に行くとき」(2016)

王盛弘(1970年生まれ)

「最高の季節」(2010)

江鵬(1975生まれ)

「はい、私は日本へお花見に行ったことがないんです」(2016)

陳柏青(1983年生まれ)

「“あの頃”、僕は東京にいた」(2015)

胡慕情(1983年生まれ)

「羊をめぐる冒険」(2013)

盛浩偉(1988生まれ)

「仙台の思い出」(2017)

朱和之(1975生まれ)

「熊本城とは」(2015)

吳明益(1971年生まれ)

「金魚に命を乞う戦争」(2005)

盧慧心(1979生まれ)

「美女のように背を向けて、あなたと話す」(2016)

伊格言(1977年生まれ)

「阪堺電車の時間」(2018)

言叔夏(1982年生まれ)

「日暮れの日暮里」(2013)

劉叔慧(1969年生まれ)

「夫と子どもを捨てて、何もしないで過ごす革命の旅」(2015)

李屏瑤(1984年生まれ)

「母を連れて京都へ行く、ときには叔母さんもいっしょに」(2015)

王聰威(1972年生まれ)

「京都のパイプ」(2018)

舒國治(1952年生まれ)

「門外漢の見た京都」(2006)

収録作品から作家の世代の特徴について、次のようなことがわかる。壮年世代は、過去の歴史遺産のプラス面もマイナス面も共に背負っており、たとえば、呉明益の「金魚に命を乞う戦争」のように、既存の日本のイメージと格闘しながら、台湾との対話を継続しようとする作品もある。それに対して、その次の世代である黃麗群の「いつかあなたが金沢に行くとき」は、客観的に日本がとらえられており、日本文学や日本文化との内面的な対話が試みられている。

また、各エッセイの舞台となるのは、東北、東京、関西、九州、とほぼ日本全土が入っている。テーマは「旅行」だけでなく、日本史、日台近代関係史、宗教、言語、文化交流など、様々なものに亘っている。京都、飛騨(ひだ)高地および高野山の寺院参拝、日本伝統文化との触れ合い、そして、三島由紀夫の『潮騒』の舞台への訪問、日本語の標準語と大阪弁との語感の比較、東京での花見へのあこがれとイメージ、311東日本大震災の体験、そして取材目的で被災地である東北地区への訪問という内容から見れば、訪問地域はさまざま、そして必ずしも観光名所に集中しておらず、ユーモアにあふれる異文化の体験談という特徴を持っている⁴。日本人読者にとって、このような散文集は、まさに台湾人作家の目を通して、知られていない日本の一側面を改めて認識させるものとなっている。また、新しい視線で日本人読者の自らの文化や習慣をとらえなおしてもらうことも、この散文集を出版することの目的でもある。

以上のような問題意識から、2018年12月に日本で翻訳・出版された台湾作家の日本紀行文集が『我的日本』である。本書を日本側がどのように受け止め、どのような反響を寄せたのかについては、次で見てみよう。

⁴ 呉佩珍「編者あとがき」(呉佩珍・白水紀子・山口守編『我的日本』白水社、2018)、pp.167-168.

3 出版後の日本における反響

『我的日本』が出版された際、作家東山彰良の推薦文は、下記のとおりである。「日本という国に向けられる台湾人作家たちの眼差しは、ときに複雑で、少しばかりメランコリックで、そしてなんともあたたかい」⁵。

この散文集における台湾作家の日本を描く特徴はこの言葉に凝縮されている。

本書は2018年12月の出版後、翌年2019年2月には二刷に入り、同年夏には三刷に入っている。近年来、日本に翻訳、紹介された台湾文学作品の中で最も人気のある一冊である。また、本書に対する書評も日本の新聞や雑誌に相次いで現れた。『読売新聞』の「気鋭の台湾作家18名が見た日本」(2019年1月19日)はその最初の書評である。

この書評が特に注目しているのは、東山彰良さんが推薦文を寄せている点と、日本での翻訳が既に出されている作家呉明益と甘耀明の散文が収録されている点である。つまり、台湾文学と日本文学、文化の交錯する互文性(インターテクチュアリティ)が注目を喚起するものとなっているのである。引き続き、2019年1月26日に『日本経済新聞』に掲載された「旅する台湾人作家らの洞察」は、台湾人作家と欧米人作家が日本を旅する時の着目点の大きな差異、そして台湾人作家がどのように日本を観察するかに焦点を当てている。

台湾の現代作家たちが日本への旅の記憶をつづった紀行エッセーを集めた。多くはリラックスした観光旅行記だが、日台の近現代史や社会状況に対する言及もあり、台湾人のまなざしに映る日本の姿が興味深い。

西欧の作家が日本を旅すれば、荘厳な神社仏閣のたたずまいや、快適さに満ちた都市空間、あるいは様々な場所で目にするアニメの図像などについて書くだろう。だが台湾人作家らが目をとめるのは、そうした記号的な日本のイメージではない。

観光地巡りにあくせくしないことで見える金沢の「無心無意」。皇居をジョギングして感じた、震災後の東京で生きることの過酷さ。テレビでタレントがやりとりするのを聞いて感じた「冷たい日本語」。いずれも単純なことを語っていない。神奈川県大和市の海軍工廠跡地を訪ねた呉明益の文章は重い問いをはらんでいる。爆撃で多くの台湾人少年工が死んだ場所に立ち、呉は石川達三や尾崎士郎ら戦争を書いた作家に思いを巡らせる。そして「自分の国が戦争の罪の中心となっていることをそうした作家がどう考えたか」と想像するのである。

⁵ 「帯」(呉佩珍・白水紀子・山口守編『我的日本』白水社、2018)。

作家たちはそれぞれの「我的日本(私の日本)」を語りつつ、時として鋭い洞察を示す。日本をよく知る隣人による異色の文集であり、発見に満ちた一卷だ⁶。

同年2月3日に著名な詩人であり、評論家でもある蜂飼耳は、『信濃毎日新聞』に掲載された「新鮮な視点で綴る日本の日常」で、次のように評価している。「本書は日本の日常を新鮮な視点と言葉にさらしている。こんなアンソロジーを読んでみたかった。」⁷

また、同年同月4日の『東京新聞』「大波小波」のコラム「台湾人の日本紀行」は、編者と日本文壇、そして日本の台湾研究とのゆかりについて触れ、その上で、このエッセイ集の中で描かれている日本観がアジアの隣国のそれとは異なっている点を言及している。

「中国人観光客の派手派手しい買い物が話題になって久しい。その傍らで台湾人文学者がかくも繊細なまなざしを日本の都市と文化に向けていることは、もう少し知られてもよい。」⁸

そして同年、雑誌『東京人』3月号で、本書は「今月の東京本」の一冊に選ばれた。さらに、反響を更に高め、第三刷の決定打となったのは、同年3月3日『毎日新聞』における川本三郎の書評「台湾作家を通して知る日本の情緒」である。

台湾の作家が奥さんと飛騨国分寺で除夜の鐘を聞く。別の作家は、三島由紀夫の『潮騒』の舞台になった伊勢湾に浮かぶ神島に行く。また別の作家は、東日本大震災のあとに福島県の南相馬市や川俣町を訪ねる。親日家が多いことで知られる台湾の、現在活躍している作家たちが日本を旅した紀行文を集めたアンソロジー。『鬼殺し』で知られる甘耀明、『歩道橋の魔術師』『自転車泥棒』の呉明益、『ここにいる』の王聡威、『グラウンド・ゼロ 台湾第四原発事故』の伊格言ら、その作品が日本ですでに紹介され、話題になった作家をはじめ、未紹介の作家ふくめ計十八人が日本各地を縦横に旅する。皆さん何度も日本を訪れている。想像以上に日本と台湾の距離は近い。飛騨国分寺や神島、南相馬市など思いもかけないところにも旅する。よく日本を知っている。

ある作家は、可睡斎(かすいさい)という静岡県にある禅寺に宿泊し、座禅を体験する。焼津の染物店では大漁旗の染物体験をする。

また別の作家は高野山を訪れその清澄な和建築の世界に魅了される。数日間滞在し、雨のなかよく歩いたのに気づいてみると白い靴が汚れていない。山林の道がきれいだったからと知る。

6 「旅する台湾人作家らの洞察」(『日本経済新聞』2019.1.26)。

7 蜂飼耳「新鮮な視点で綴る日本の日常」(『信濃毎日新聞』2019.2.3)。

8 雪「コラム 大波小波 台湾人の日本紀行」(『東京新聞』2019.2.4)。

日本の四季の美しさにも感嘆する。とくに草花の繊細さ。奈良で見る萩、京都のトケイソウ、あるいは朝顔。稲田の畦道(あぜみち)のあちこちに咲く彼岸花はなんと美しいだろう。

日本と台湾の歴史に思いを馳せる作家もいる。熊本城を訪ねた作家は、西南戦争の時にこの城に立て籠もって薩摩軍を防いだ政府軍のなかには、のちに台湾総督となる樺山資紀と児玉源太郎がいたことを指摘する。

『自転車泥棒』の作者、呉明益の父親は、戦争中、少年工として、神奈川県の高座海軍工廠で働いた。父の足跡を求めて、日本でもいまや語られることの少ない高座の海軍工廠跡地を訪ねる。

かつて戦闘機を作っていた工場の跡を二度訪ね、高座の町で、道を行く人に聞いて「戦没台湾少年之慰霊碑」を探し当てる。爆撃で死亡した台湾少年工のために、日本人がお金を集めて建立した慰霊碑だった。

この作家は、若き日の三島由紀夫が高座の工場で勤労働員で働いていたことも知る。歴史的にも台湾と日本のつながりは深い。台湾の現代作家の親の世代は日本統治時代に生きていたことが改めて思い出される。

台湾の作家たちが、日本文化に精通していることにもうれしく驚かされる。3・11のあとに福島県を訪れた作家は、そのあと北鎌倉の円覚寺に行き、小津安二郎監督の墓に詣でる。墓石に彫られた「無」の字を見て、福島での衝撃がこみあげてきて、思わず落涙する。

3・11のその日、たまたま東京にいた作家は思い切って東京の町を歩く。人の姿の見えないお台場に行く。「東京ラブストーリー」をはじめ、数々の日本のトレンドドラマが撮影された場所を歩きながら、それらを見ていた自分の青春時代を思い出す。

金沢を旅する作家は五木寛之の『朱鷺(とき)の墓』や松本清張の『ゼロの焦点』に言及する。東京の荒川べりを歩く作家は中島哲也監督の「嫌われ松子の一生」を思う。台湾と日本は近い。

「私が京都へ行くのは田舎の稲田のためだ」「私が京都に行くのは、小さな橋や流れる水のためだ」と京都への愛情がリフレインされる舒國治の「門外漢の見た京都」も出色。永井荷風『日和下駄(げた)』の京都版の趣き。

京都には「他の地では消え失(う)せて久しい唐代、宋代の情緒」があるという指摘に納得する。⁹

以上、『我的日本』をめぐる書評からわかるように、『我的日本』が日本人読者にとってなじみやすく、新鮮さを覚える一冊になったのは、台湾人作家が日本の風景や生活日常を新たな目でとらえており、それに加えて、ある程度、「日本を知っている」という土台があったからなのである。

⁹ 川本三郎「台湾作家を通して知る日本の情緒」(『毎日新聞』2019.3.3)。

4 結びにかえて

日本人読者にはこの散文集を通して、台湾現代作家と文学作品の「日本表象」、そして台湾文壇の各世代の作家をより知るきっかけになってほしい。日本の重要なマスメディアにおける書評やその紹介から、『我的日本』は、ある程度の注目と反響を得られたと思う。もともと台湾の政治大学における東アジア作家会議に参加した日本人作家、津島佑子、多和田葉子によって触発された翻訳及び出版プロジェクトは、ある意味で日台文学交流によって生まれた収穫の一つでもある。さらに日本における『我的日本』の反響によって、今度、この散文集は、台湾に「逆輸入」され、2021年の年末に中文の単行本として、出版されることとなった。ある意味で、『我的日本』は、日台文壇の交流にはかつてなかった、全く新しい方向を切り開いたのである。

参考文献(Bibliography)

- 津島佑子(2008)『あまりに野蛮な』東京：講談社。Tsushima, Yuko(2008) *Amanini yabanna*. Tokyo: Kodansha.
- 吉田修一(2012)『路(ルー)』, 東京：文芸春秋。Yoshida, Shuichi(2012) *Ru*. Tokyo: Bnngeshunju.
- 南乃アサ(2015)『美麗島紀行』, 東京：集英社。Minano, Asa(2015) *Bireto kika*. Tokyo: Shuesha.
- 呉佩珍、白水紀子、山口守編(2018)『我的日本』, 東京：白水社。Wu Peichen, Shirozu Noriko, Yamaguchi Mamoru(2018) *Wareteki Nihon*. Tokyo: Hakususha.
- 「旅する台湾人作家らの洞察」『日本経済新聞』2019.1.26. *Tabisuru Taiwanin Sakkara no dosatsu*. Nihonkeizai Shibun. 2019.1.16.
- 多和田葉子「プロムナード 台湾の月台」『日本経済新聞』2017.5.1. Tawada, Yoko *Promuna-do Taiwan no purattofomu*. Nihonkeizai Shibun. 2017.5.1.
- 雪「コラム 大波小波 台湾人の日本紀行」『東京新聞』2019.2.4. Yuki Korumu *Oonami sazanami Taiwanjin no nihonkika*. Tokyo Shinbun. 2019.2.4.
- 川本三郎「台湾作家を通して知る日本の情緒」『毎日新聞』2019.3.3. Kawamoto Saburo *Taiwan Sakka wo toshite shiru nihon no jocho*. Mainichi Shinbun. 2019.3.3.
- 呉佩珍(2019.3)「當代台灣的日本文學譯介二三事」『文訊』Wu, Peichen *Dang dai Taiwan de Ruben Wenxiao Yijie er san shi*. Wen Xun. 2019.3.